

東京工業大学

窯業同窓会会員名簿

1983年12月



旭焼額皿 (明治26~27年)

## 東京工業大学 窯業同窓会 会員名簿目次

東京職工学校、東京工業学校、東京高等工業学校教職員、卒業生名簿	7
東京工業大学（旧制）教職員、卒業生名簿	21
東京工業大学（新制）教職員、卒業生名簿	31
他学科・他専攻出身者名簿	45
他校出身者名簿	53
職場別会員名簿	57
五十音順会員名簿	75
工学部無機材料工学科の現況	139

### 年令早見表

生年	十二支	干支	年令	西曆	生年	十二支	干支	年令	西曆
明治 18	乙酉	酉	99	1885	昭和 10	乙亥	亥	49	1935
19	丙戌	戌	98	1886	11	丙子	子	48	1936
20	丁亥	亥	97	1887	12	丁丑	丑	47	1937
21	戊子	子	96	1888	13	戊寅	寅	46	1938
22	己丑	丑	95	1889	14	己卯	卯	45	1939
23	庚寅	寅	94	1890	15	庚辰	辰	44	1940
24	辛卯	卯	93	1891	16	辛巳	巳	43	1941
25	壬辰	辰	92	1892	17	壬午	午	42	1942
26	癸巳	巳	91	1893	18	癸未	未	41	1943
27	甲午	午	90	1894	19	甲申	申	40	1944
28	乙未	未	89	1895	20	乙酉	酉	39	1945
29	丙申	申	88	1896	21	丙戌	戌	38	1946
30	丁酉	酉	87	1897	22	丁亥	亥	37	1947
31	戊戌	戌	86	1898	23	戊子	子	36	1948
32	己亥	亥	85	1899	24	己丑	丑	35	1949
33	庚子	子	84	1900	25	庚寅	寅	34	1950
34	辛丑	丑	83	1901	26	辛卯	卯	33	1951
35	壬寅	寅	82	1902	27	壬辰	辰	32	1952
36	癸卯	卯	81	1903	28	癸巳	巳	31	1953
37	甲辰	辰	80	1904	29	甲午	午	30	1954
38	乙巳	巳	79	1905	30	乙未	未	29	1955
39	丙午	午	78	1906	31	丙申	申	28	1956
40	丁未	未	77	1907	32	丁酉	酉	27	1957
41	戊申	申	76	1908	33	戊戌	戌	26	1958
42	己酉	酉	75	1909	34	己亥	亥	25	1959
43	庚戌	戌	74	1910	35	庚子	子	24	1960
44	辛亥	亥	73	1911	36	辛丑	丑	23	1961
大正 1	壬子	子	72	1912	37	壬寅	寅	22	1962
2	癸丑	丑	71	1913	38	癸卯	卯	21	1963
3	甲寅	寅	70	1914	39	甲辰	辰	20	1964
4	乙卯	卯	69	1915	40	乙巳	巳	19	1965
5	丙辰	辰	68	1916	41	丙午	午	18	1966
6	丁巳	巳	67	1917	42	丁未	未	17	1967
7	戊午	午	66	1918	43	戊申	申	16	1968
8	己未	未	65	1919	44	己酉	酉	15	1969
9	庚申	申	64	1920	45	庚戌	戌	14	1970
10	辛酉	酉	63	1921	46	辛亥	亥	13	1971
11	壬戌	戌	62	1922	47	壬子	子	12	1972
12	癸亥	亥	61	1923	48	癸丑	丑	11	1973
13	甲子	子	60	1924	49	甲寅	寅	10	1974
14	乙丑	丑	59	1925	50	乙卯	卯	9	1975
昭和 1	丙寅	寅	58	1926	51	丙辰	辰	8	1976
2	丁卯	卯	57	1927	52	丁巳	巳	7	1977
3	戊辰	辰	56	1928	53	戊午	午	6	1978
4	己巳	巳	55	1929	54	己未	未	5	1979
5	庚午	午	54	1930	55	庚申	申	4	1980
6	辛未	未	53	1931	56	辛酉	酉	3	1981
7	壬申	申	52	1932	57	壬戌	戌	2	1982
8	癸酉	酉	51	1933	58	癸亥	亥	1	1983
9	甲戌	戌	50	1934	59	甲子	子	0	1984



## 御 挨拶

会長中山一郎（昭5）

年の瀬を迎えましたが同窓の皆様には益々御清祥に御過ごしの事と存じます。

懸案の会員名簿を4年ぶりにお届けします。同窓会の一番大事な仕事は同窓各位の相互の友愛の輪を広げることであると考えます。その意味でこの名簿がお役に立てば幸いです。

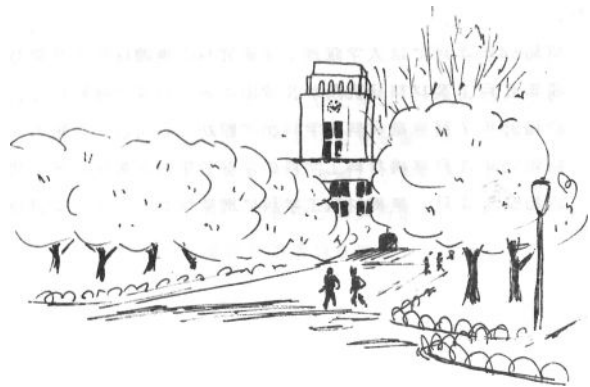
また、同窓会と大学とは表裏一体のもので、大学に活気があれば同窓会も生き活きとして楽しいものになる筈です。セラミックスの重要性が認められて、昨年度は無機材料工学科の学生定員が30名に増員され、本年度はさらに機能性セラミックス講座が新設されましたことは御同慶の至りです。

来年はワグネル先生が東京職工学校の教授として陶器玻璃工学なるものをわが国に紹介された明治17年から数えて100年になります。ついでには記念の行事を計画したいと考えますので何か良い案がありましたら御連絡下さい。

最後に、当然の事ながら本会の経費は全て会員その他の御厚意による寄附金で支弁されてお



ります。この名簿に広告を掲載していただいた各社に御礼申し上げるとともに、会員の皆様の一層の御支援御協力を御願い申し上げます。



## 東工大におけるセラミックス教育の歴史

我国における近代的な窯業教育は本学の前身である東京職工学校で開始された。

明治14年5月26日浅草蔵前の地に創立された東京職工学校には化学工芸科と機械工芸科とが置かれたが、明治17年には化学工芸科の専修科目としてワグネルによる窯業学が開講され、明治19年8月には上記の2学科を各専門にわけることになって陶器玻璃工科が生れた。

明治23年3月東京職工学校が東京工業学校と改められ、明治27年には科名を窯業科と改称した。

明治34年5月東京工業学校が東京高等工業学校に昇格したが、その際の6学科の一つである窯業科の初代科長には工学博士高山甚太郎が任命された。大正3年には大阪高等工業学校の窯業科を合併して名実共に我国最高の窯業教育機関となった。この時代の教官は科長平野耕輔、工場長芝田利八、教授近藤清治および大阪高工から転任の教授金島茂太の諸氏が中心であった。

大正12年9月の関東大震災は窯場以外の窯業科の全設備を灰塵と化した。窯業科は駒場の帝大農学部に移住したのち、翌年大岡山駅北側に建てられたバラック校舎に移転した。

昭和4年4月官立工業大学の官制が制定されて東京高等工業学校が東京工業大学に昇格して科名が窯業学科と改められ、昭和7年には初めての大学生が卒業した。大学昇格当時の主任教授は工学博士近藤清治で、翌年には硝子担当の教授として工学博士田端耕造が就任した。

昭和9年5月にはバラック校舎から新しく竣工した本館の建物に移転し、翌年には工場と窯場が完成した。昭和18年1月には窯業研究所の官制が公布され、所長事務取扱いとして平野耕輔、所長付として教授山内俊吉、専任所員として教授河嶋千尋、教授鈴木信一その他の諸氏が任命された。

太平洋戦争への突入によって学生生活は大きな影響を受け、卒業も繰上げられて昭和16年には3月と12月の2回学部の卒業式が行われ、昭和

17年から昭和22年の間は9月卒業となった。戦争の激化に伴って設けられた工業技術員養成所は昭和16年から昭和21年の間、附属専門部は昭和23年に卒業生を出している。

太平洋戦争の終結に伴って実施された学制改革によって昭和24年から新制大学が発足し、昭和28年3月には旧制最後の卒業生と新制第1回の卒業生が同時に送り出された。新制度による大学院は昭和28年度から発足した。

本学では戦後のいわゆる和田改革によって学科制度が廃止されたが、昭和35年にこの制度が復活されることとなって無機材料工学科が生れた。なお、学科制度が廃止されていた期間中も窯業関係の研究室と卒業生の団結は強く、窯業同窓会は従前通り維持されていた。

昭和33年3月窯業研究所と建築材料研究所とを統合整備して新たに工業材料研究所が設置された。

新制大学の発足とともに大学の組織と在学生数は急速に膨張し、昭和30年7月には工学部から理工学部となり、昭和42年6月には工学部と理学部とに分離した。大学院の組織も、発足当時の大学院工学研究科が昭和31年4月には大学院理工学研究科となり、昭和50年4月には新たに学部をもたない大学院総合理工学研究科が生れた。

昭和54年4月には大学院理工学研究科の無機材料工学専攻が独立した。

同年6月工業材料研究所が長津田キャンパスに移転した。

昭和55年7月無機材料工学科が本館から石川台1号館および石川台4号館に移転した。

昭和55年4月無機材料工学科の学部学生の定員が30名に増員された。

昭和58年4月、無機材料工学科に機能性セラミックス講座が増設された。

## 窯業同窓会規約

1. 本会は窯業同窓会と称する。
2. 本会は会員相互の親睦を図り窯業界の向上発展を期することを目的とする。
3. 本会は事務所を東京都目黒区大岡山東京工業大学内に置く。
4. 本会は以下の事業を行う。
  - (1) 会誌の発行 (2) 名簿の発行 (3) その他幹事会で必要と認めた事業
5. 本会会員は東京工業大学の窯業関係者で組織する（内規参照）。
6. 本会の経費は、会員その他からの事業寄金、その他の収入で支弁する。会計年度は毎年4月に始まり翌年3月に終る。
7. 本会は毎年総会を開き以下について審議する。
  - (1) 会務の報告 (2) 役員の改選 (3) 規約の改正
  - (4) その他
8. 本会に以下の役員をおき任期は2年とする。ただし再選は差支えない。
  - (1) 会長 1名 (2) 副会長 若干名 (3) 幹事 若干名
  - (4) 常任幹事若干名
9. 会長、副会長および幹事は総会で選出する。常任幹事は幹事の互選とする。
10. 会長は本会を総理し、副会長は会長事故あるとき代行する。常任幹事は会務（庶務、会計）を処理する。幹事は本会の重要事項を審議し、地方、各職場、クラス等の状況および本会に対する意見を本部に連絡する。
11. 本会は名誉会長および相談役をおくことができる。名誉会長および相談役は役員で推薦し、総会で承認をうる。
12. 本会に支部を置くことができる。支部は本部と連絡を密にし、会の発展に協力する。

## 内 規

1. 工学部無機材料工学科および大学院無機材料工学専攻の卒業（修了）者と専任の教官、および旧制大学以前の窯業科卒業生と教官を会員とする。学科制度が廃止された期間中の学部卒業生と、大学院無機材料工学専攻が独立する以前の修了者については、関係の研究室の出身者を会員とする。
2. 本学の他学科および他専攻の出身者と専任教員については、本会と関係が深く入会を申込みれた方は会員とすることができる。
3. 本学以外の出身者で、本会と関係が深く特に入会を希望された方についても会員とすることができる。

## 窯業同窓会の沿革

本会は蔵前時代の東京高等工業学校窯業科第1回生以来同窓親睦の会として発足し、大正時代に鳥又會と称して洋行および帰朝の送迎会や懇親会を開いていたが、昭和の始め頃に愛窯会となり、昭和8年には窯業同窓會となった。さらに昭和18年に八日會（窯化会に通ずる）と改称

して毎月会を催していたが、戦局の悪化とともにその活動は中断した。戦後の昭和22年に会名を再び窯業同窓会と改称して活動を再開した。それ以来会は年と共に発展し、毎年総会および懇親会を開き現在に至っている。

## 昭和 58、59 年度 窯業同窓会役員

会 長 中山一郎  
名誉会長 山内俊吉  
副会長 素木洋一 田中 弘 田中広吉 埜崎堅造  
相談役 石塚正信 倉田元治 江副勇馬  
大石信男 田辺三郎 長崎 勸 森谷太郎  
田賀井秀夫 斎藤進六  
常任幹事 浜野健也 小坂丈予 名取賢荘  
加藤誠軌 澤岡 昭 山根正之 大門正機  
上西義介  
幹事 左右田孝男 尾野勇雄 長崎準一 福井 哲  
田上嘉秋 長谷正義 加藤政良 島岡達三  
赤沢次男 境野照雄 奥田 進 佐野和夫  
田端精一 鈴木哲夫 愛甲 昇 藤井豊男  
梅田夏雄 大庭 宏 奥田 博 小出儀治

鈴木弘茂 藤井重信 太田千里 遠藤幸雄  
古賀義根 大槻彰一 田中博一 毛利良雄  
牧村信之 利根川洋 福浦雄飛 吉田一栄  
山本 登 加藤 鈔 各務芳樹 佐野川建  
杉浦孝三 成瀬庸一 川浪重年 菊地 央  
宇田川重和 亀井四郎 浅野正和 安竹了和  
宗宮重行 福井 博 矢島一治男 山本博孝  
堀江 勲 吉野成男 中村 厚 原田 賢  
尾野幹也 青木 進 長谷川安利 吉村昌弘  
武 孝夫 木村脩七 大場立夫 水谷惟恭  
井関孝善 鏗江七郎 大津賀 望 倉田 貢  
星野芳夫 丸茂文幸 斎藤安俊 中村哲朗  
今井久夫

## 東京職工学校、東京工業学校、東京高等工業学校時代

我国における近代的な窯業教育は本学の前身である東京職工学校で開始された。

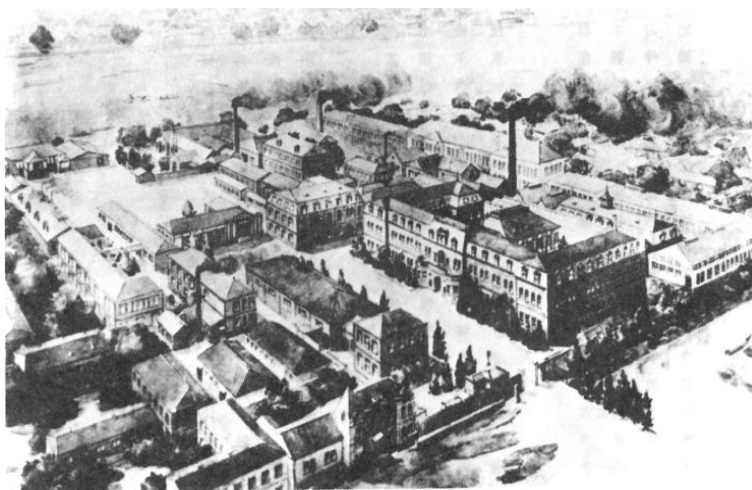
明治 14 年 5 月日浅草蔵前の地に創立された東京職工学校には化学工芸科と機械工芸科とが置かれたが、明治 17 年には化学工芸科の専修科目としてワグネルによる窯業学が開講され、明治 19 年 8 月には上記の 2 学科を各専門にわけることになって陶器玻璃工科が生れた。

明治 23 年 3 月東京職工学校が東京工業学校と改められ、明治 27 年には科名を窯業科と改称した。

明治 34 年 5 月東京工業学校が東京高等工業学校に昇格したが、その際の 6 学科の一つである窯業科の初代科長には工學博士高山甚太郎が任命された。大正 3 年には大阪高等工業学校の窯業科を合併して名実共に我国最高の窯業教育機関となった。この時代の教官は科長平野耕輔、工場長芝田利八、教授近藤清治お

よび大阪高工から転任の教授金島茂太の諸氏が中心であった。

大正 12 年 9 月の関東大震災は窯場以外の窯業科の全設備を灰塵と化した。窯業科は駒場の帝大農学部には仮住いしたのち、翌年大岡山駅北側に建てられたバラック校舎に移転した。



蔵前時代の東京高等工業学校の全景

## 近代窯業育ての親 ワグネル

文明開花の明治時代のわが国で近代工業技術の確立のためにワグネル (Dr. Gottfried Wagener) の果たした役割は非常に大きい。ワグネルは1831年、ドイツのハノーバーで一官吏の家に生まれた。1849年ゲッチンゲン大学に入学して、当時一流の大家である数学のガウス教授らの教えを受け21歳の若さでドクトル・フィロソフィーの学位を得た。

明治元年、38歳のときに来朝して、同3年には鍋島藩に招かれて有田焼の改良を図った。明治4年、東京に移って大学南校、翌年には大学東校で物理学および化学を教授した。また、余暇を利用して日本の工芸史を研究し、銅器、七宝、陶器、養蚕、漆器などに興味をもった。

明治5～6年にはウィーン万国博覧会御用掛をつとめて、わが国の美術工芸品をはじめて世界に紹介した。帰国後は東京開成学校、文部省所轄の製作学校の教師をつとめ、勸業寮と博物館の導師を兼務した。その間、陶磁器の製造については、石膏の使用法、陶器の鑄込法、新型の旋盤、回転粉末器、臼形粉末器、造り土の混合法、陶磁器用絵具、水金の使用法について指導し、それ以外でも電気鍍金法、写真術、顔料製造法、合金製造法、鉍物性染色法を教授した。

明治9年、フィラデルフィア万国博覧会の委員を務めた後、明治11年京都府に招かれて医学校で理工学を教え、舎密局で伝習生を教育した。この間、七宝用釉薬を研究して透明釉薬を開発し、陶器用絵具、ガラス器、石鹼製造、ビール製造などについて指導した。

ワグネルは早くから実用教育機関の重要なことを指摘してたびたび当局に建白書を提出したが、その結果として東京職工学校が創立された。同17年、同校の専修科目としてワグネルの陶器玻璃工学が開講され、同19年には陶器玻璃工科が独立してワグネルが主任官に就任した。

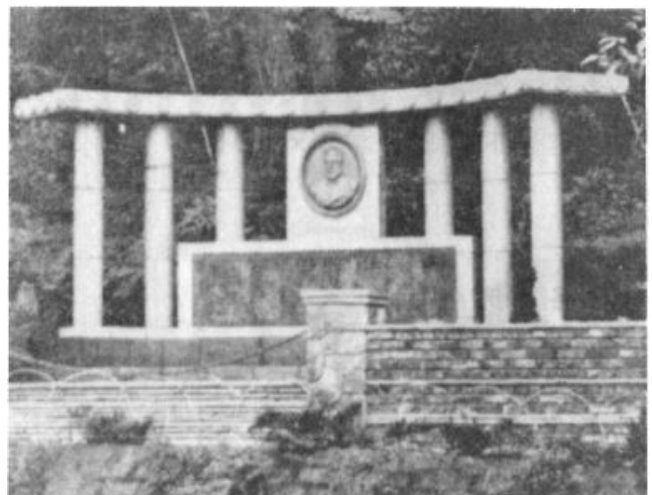


G. Wagener

ワグネル先生

明治23年、持病のリューマチが悪化したワグネルは1年間の賜暇を得て帰国したが病状はそれほど回復せず、同25年1月東京の原職に復帰した。帰任後、彼の病状はさらに悪化して11月8日に永眠し青山の外人墓地に葬られた。

東工大原子炉工学研究所横のひょうたん池のほとりにある記念碑は昭和12年に建造された。



## 東京職工学校、東京工業学校、東京高等工業学校時代の窯業関係教職員

### 教授

W. G. Wagener	x	金島茂太	x
植田豊橋	x	近藤清治	x
高松豊吉	x	榎本修二	x
平野耕輔	x	芝田理八	x
安田禄造	x	田端耕造	x
細木松之助	x		



近藤清治先生



平野耕輔先生

### 助教授

太田能寿	x	武藤三枝	x
大谷謙一	x	大友作之丞	x
米谷忠治郎	x	川崎正男	x
浅井郁太郎	x	桜川貞雄	x
内藤道太郎	x	末野悌六	x



芝田理八先生



榎本修二先生

### 教諭

山寺容麿	x
------	---

### 講師

高山甚太郎	x	熊沢治郎吉	x
加福均三	x	古山六郎	x
北村弥一郎	x	中尾万三	x
中田清次	x	大野政吉	x
内海三貞	x	宮下孝雄	x
富山国之助	x		

### 嘱託

藤江永孝	x	各務鑛三	
中澤岩太	x	板谷波山	x



蔵前時代の窯業科窯場



## 東京工業大学 (旧制)時代

昭和4年4月官立工業大学の官制が制定されて東京高等工業学校が東京工業大学に昇格して科名が窯業学科と改められ、昭和7年にはじめての大学生が卒業した。大学昇格当時の主任教授は工学博士近藤清治で、翌年には硝子担当の教授として工学博士田端耕造が就任した。

昭和9年5月にはバラック校舎から新しく竣工した本館の建物に移転し、翌年には工場と窯場が完成した。昭和18年1月には窯業研究所の官制が公布され、所長事務取扱いとして平野耕輔、所長付として教授山内俊吉、専任所員として教授河嶋千尋、教授鈴木信一その他の諸氏が任命された。

太平洋戦争への突入によって学生生活は大きな影響を受け、卒業も繰上げられて昭和16年には3月と12月の2回学部の卒業式が行われ、昭和17年から昭和22年の間は9月卒業となった。戦争の激化に伴って設けられた工業技術員養成所は昭和16年から昭和21年の間、附属専門部は昭和23年に卒業生を出している。

戦争の終結に伴って実施された学制改革によって昭和24年から新制大学が発足し、昭和28年3月には旧制最後の卒業生と新制第1回の卒業生が同時に送り出された。当時の窯業関係の教官は教授山内俊吉、教授河嶋千尋、教授森谷太郎の諸氏が中心であった。

本学では戦後のいわゆる和田改革によって学科制度が廃止されたが、その期間中も関係の研究室と卒業生の団結は強く、従前通り窯業同窓会が維持されていた。



### 旧制大学時代の窯業関係教職員

教授	近藤清治	X	山内俊吉	
	田端耕造	X	森谷太郎	
	鈴木信一	X	河嶋千尋	
助教授	榎本修二	X	川久保正一郎	
	末野悌六	X	素木洋一	
	草間 保	X	清浦雷作	
	山田久夫		田賀井秀夫	
講師	平野耕輔	X	不破橘三	X
	奥田 誠一	X	吉田 博	X
	黒田泰造	X	稲生謙次	X
	中村能一	X	岩井津一	X

### その他職員および非常勤講師

宮川愛太郎	X	伊藤善高
杉 建一	X	各務芳樹
塩田力蔵	X	奥田 進
滝田岩造	X	斎藤進六
三角愛三	X	毛利純一
岩田恒三郎	X	境野照雄
藤井光蔵	X	太田千里
三浦武男	X	佐多敏之
吉木文平	X	鈴木弘茂
橋本謙一	X	杉浦孝三
佐藤三平	X	武司秀夫
村田順弘	X	鯉江七郎
近藤連一	X	佐藤 猛
耕山菊郎		桃崎順二郎
遠藤敏夫		加藤竹蔵
中村八助		上西義介
河井信雄		高橋俊郎
田辺昌之		中 俊
倉田 貢		大矢真吾
大河原 晋		上田政夫
笹沼宗一郎		

## 東京工業大学（新制）

太平洋戦争の終結に伴って実施された学制改革によって昭和24年から新制大学が発足し、昭和28年3月には旧制最後の卒業生と新制第1回の卒業生が同時に送り出された。新制度による大学院は昭和28年度から発足した。

本学では戦後のいわゆる和田改革によって学科制度が廃止されたが、昭和35年にこの制度が復活されることとなって無機材料工学科が生まれた。なお、学科制度が廃止されていた期間中も窯業関係の研究室と卒業生の団結は強く、窯業同窓会は従前通り維持されていた。

昭和33年3月窯業研究所と建築材料研究所とを統合整備して新たに工業材料研究所が設置された。

新制大学の発足とともに大学の組織と在学学生数は急速に膨張し、昭和30年7月には工学部から理工学部となり、昭和42年6月には工学部と理学部とに分離した。大学院の組織も、発足当時の大学院工学研究科が昭和31年4月には大学院理工学研究科となり、昭和50年4月には新たに学部をもたない大学院総合理工学研究科が生まれた。

昭和54年4月には大学院理工学研究科の無機材料工学専攻が独立した。

同年6月工業材料研究所が長津田キャンパスに移転した。

昭和55年7月無機材料工学科が本館から石川台1号館および石川台4号館に移転した。

昭和55年4月無機材料工学科の学部学生の定員が30名に増員された。



無機材料工学科の建物

昭和58年4月、無機材料工学科に機能性セラミックス講座が増設された。

### 東京工業大学（新制）窯業関係元教職員

#### ◎工学部無機材料工学科

教授 山内俊吉 川久保正一郎 近藤連一 x  
森谷太郎 素木洋一 山田久夫  
境野照雄 鈴木弘茂

助教授 草間 保

講師 稲生謙次 x 吉田 博 x

助手 宮川愛太郎 x 太田千里 新 重光  
大河原 晋 滝沢一貴 牧島亮男  
杉浦孝三 赤尾洋二 虎谷洋子  
長谷川 泰 門田和也 黒田浩二  
五十嵐幹治

技官 大矢莫吾 中 俊 干場まゆみ  
大場立夫 新田亜矢子 鈴木容子  
黒田泰弘

#### ◎原子炉工学研究所

助手 服部豪夫 向原 進 長谷貞三

#### ◎工業材料研究所

教授 河嶋千尋 佐藤正雄 岩井津一 x  
清浦雷作 斎藤進六 佐多敏之  
田賀井秀夫

助教授 平野真一

講師 黒沼春雄

助手 村田順弘 x 福長 脩 秋本靖匡  
上田政夫 沖川伸司 磯部光正  
下平高次郎 秋山 豊 三浦 弘  
毛利純一 尾崎義治 鎌田喜一郎  
瀬高信雄 畑野東一 鈴木健之

技官 笹本 忠

野口基一 松本幸生 石坂政俊  
原 弘 小片 仁 坂井和雄  
太田達雄 小林迪夫 中村俊郎  
伊藤秀一

## 窯業関係の現職員 (昭和 58 年 11 月現在)

## 長津田だより

### ◎工学部無機材料工学科

浜野健也 (昭 23)

教授 加藤誠軌 宇田川重和 小坂文子  
山根正之 木村脩七 (併任)  
助教授 水谷惟恭 大津賀望 大門正機  
助手 太田京一郎 平林順一 植松敬三  
岡田 清 浦部和順 後藤誠史  
井川博行 浅賀喜代志 井上 悟  
林 剛  
技官/事務官 松山勝美 大沢栄也 桜井 修  
上西義介 山口千恵子 福富路子

### ◎原子炉工学研究所

教授 井関孝善  
助教授 丸山忠司  
技 官 今井雅三

### ◎工業材料研究所

教授 丸茂文幸 中村哲朗 齋藤安俊  
澤岡 昭 星野芳夫 木村脩七  
宗宮重行 浜野健也  
助教授 森川日出貴 近藤建一 橋爪弘雄  
安田栄一 今井久雄 吉村昌弘  
中川善兵衛  
助 手 田中清明 高見敬一 丸山俊夫  
高木喜樹 宇都宮泰造 伊藤紀子  
湊 一郎 薄葉 州 伊藤義孝  
田辺靖博 虎谷秀穂  
技 官 佐々木清裕 長谷川美憲

キャンパスの中央にある加藤山が様々な新緑に色どられて来ました。工材研の西隣の山を崩して造成中だった運動場も仮整地ながら整備が終り、昨年 10 月のすずかけ祭の折に松田学長の始球式で公開されました。昼休みや夕方、野球などに興ずる若い人達のニギヤカな声がきこえて来ます。加藤山の手前には洪水調整池の役をする野外ステージができました。

昨年度から進められていた大岡山—長津田間の光通信ケーブルの工事も完了し、工材研にも端末機を置いた研究指導室ができました。これで大岡山の無機材料工学科などとの連絡も便利になるはずです。工材研も大部門制への移行が終り、この一年程で新しく教授が 2 人、助教授が 4 人誕生しました。現状は別表のとおりです。長津田地区全体の事務組織が改められて、工材研の事務室長も廃止になりました。寂しい感じです。現在事務職員は 6 名です。また学生、研究生はこの 4 月で、建築系を含め学部学生 13 名、大学院学生 47 名、研究生等 33 名、この内外国人は 11 名で、中国、台湾、韓国、インド、スリランカ、ポーランドなど多彩です。

工材研は御存知のように窯業研究所と建築材料研究所とが合併してできたのですが、建築材料研究所が、わが国の単科大学における最初の附置研究所として設置されてから、来年の 2 月で満 50 年になります。記念行事を計画するため準備の委員会をつくりましたが、工材研の西隣に近く着工されることを期待している合同研究棟のお披露目を兼ねてもう一年位先にとか、時節柄簡素にとか色々考えております。来年の長津田だよりには計画案を書かせていただきたいと思います。

大学院総合理工学研究科に属する各専攻は、学際的研究分野をカバーするという新しい構想に基づいて昭和 50 年に生れた学部をもたない大学院です。材料科学専攻は工業材料研究所を母体として新設された専攻で、教官の多くが併任されています。



工業材料研究所の組織と職員（昭和58年4月）

部門	研究分野	教授	助教授	助手	技官・事務官
材料基礎	結晶体物性	丸茂文幸	森川日出貴	田中清明	
	高純度材料	齋藤安俊		丸山俊夫	佐々木清裕
	材料構造解析	星野芳夫	橋爪弘雄	宇都宮泰一 造郎	
材料プロセス	無機焼成材料	浜野健也	中川善兵衛		長谷川美憲
	無機溶融材料	中村哲朗		伊藤紀子 高木喜樹	
	合成無機材料	宗宮重行	今井久雄	伊藤義孝 高見敬一	
	超高压高温材料	澤岡昭	近藤建一	薄葉州	
	超高真空材料	木村脩七	安田栄一	田辺靖博	
防災材料開発	防災材料工学	古村福次郎		安部武雄	
	材料耐久物性	小池迪夫	田中享二		
	複合材料開発	黒正清治		小林克巳	
	未利用資源材料開発	(客員)稲垣道夫	(客員)見城忠男		
水熱合成材料実験施設	(併任)宗宮重行	吉村昌弘	虎谷秀穂		
工場共通			多田彦二	石井元 宗像光博、椿富美子	

大学院研究科の専攻と学生定員

総合理工学研究科 (長津田キャンパス)		
専攻名	修士定員	博士定員
物理情報工学	29	12
電子化学	38	16
社会開発工学	29	11
精密機械システム	22	10
材料科学	30	14
電子システム	18	8
化学環境工学	22	10
生命化学	30	12
エネルギー科学	25	10
システム科学	24	9
計	267	112

材料基礎部門、材料プロセス部門、水熱合成材料実験施設の教官の大部分が同窓会員である。

原子炉工学研究所の近況

井関孝善（昭38学）

昨年の4月1日に本研究所の教授を併任されていた鈴木弘茂先生が停年退官をされてから、はや1年が過ぎました。

原子炉工学研究所には現在11の研究部門がありますが、無機材料工学科と関連の深いのは原子炉燃料部門です。職員は教授に井関、助教授に丸山忠司、技官に今井雅三のわずか3人で、橋頭堡を維持しなければならない責任は重大です。鈴木研究室の時代から非酸化物を中心に研究してきましたが、核融合炉や高温ガス炉の分野からのセラミックスに対する要請が多く、期待に沿えない陣容で歯ぎしりしています。幸いに無機材料工学科の卒論学生が毎年来てくれて大きな戦力となっています。

大学院教育では、原子核工学専攻と、長津田にある総合理工学研究科に属しますエネルギー科学

専攻を合せて担当していますが、両専攻とも学部のない大学院コースで、研究室の卒業生には他大学で学部教育を受けた人がかなり含まれています。

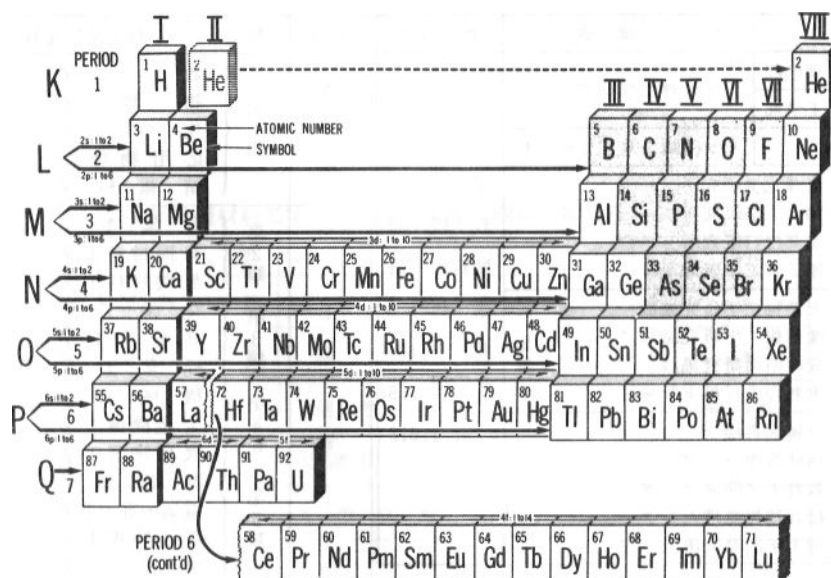
原子炉研は、昨年7月に1号館とほぼ同じ床面積（約3,000㎡）の6階建の2号館が完成して、8月に移転しました。この竣工の祝いも含めて、昨年11月20日に研究所創立25周年の記念式典があり、講演や研究所紹介が行われました。原子炉研全体の研究内容は、従来の核分裂炉に関するものから、徐々に核融合研究の占める割合が大きくなり、昭和57年度には3年間の計画で核融合炉ブランケット工学実験装置という概算要求が通っております。これは設備だけのものですが、原子炉研の将来の動向をきめるものと考えられます。



# 東京工業大学

## 工学部

### 無機材料工学科



1983年12月

### 工学部無機材料工学科の現状

現在、東工大は工学部、理学部および4つの研究所から成り立っており、セラミックス関係者は工学部の無機材料工学科、工業材料研究所その他に所属しています。

学部は理学部が5学科、工学部が16学科から構成されていて、約3,100人の学生が在学しています。学部は類別入学制をとっており、1年次学生は1類（理学系）、2類（材料系）、3類（応化系）、4類（機械系）、5類（電気系）、6類（建設系）に分かれて入学し、2年に進むときに志望と成績順に各学科に所属します。無機材料工学科に進む学生は2類に入学することになっています。2年次および3年次では無機材

東京工業大学の構成と教職員数

大学の構成		教職員数
学部 大学院	理学部	
	工学部	
	大学院理工学研究科	
	大学院総合理工学研究科	
附置 研究所	資源化学研究所	学長 1 教授 222 助教授 191
	精密工学研究所	
	工業材料研究所	
	原子炉工学研究所	
附属研 究施設	天然物化学研究施設	講師 5 助手 430 その他の職員 769 計 1,618
	像情報工学研究施設	
	資源循環研究施設	
	水熱合成材料実験施設	
附属 機関等	附属図書館	
	保健管理センター	
	教育工学開発センター	
	総合情報処理センター 理工学国際交流センター	

料工学の基礎および専門科目について勉強し、4年生になると各研究室に所属して卒業研究に従事します。学部の教育には工業材料研究所や原子炉工学研究所など関連の教官が協力しており、卒業研究の際にはそれらの研究室を志望することもできます。

無機材料工学科の学部学生の実員は昨年から10名増えて30名になりましたが、金属材料や高分子材料などの大学教育の現状と比較すると依然として著しく弱体であることを否定することはできません。現在のわが国で無機材料関係の技術者を組織的に養成している大学は本学の他に名古屋工業大学および京都工芸繊維大学を数えるだけで、博士課程の置かれている大学は本学に限られています。

大学院には理工学と総合理工学の二つの研究科が設置されており、修士課程に約1,200人、博士課程に約400人の学生が在学しています。

大岡山地区の大学院理工学研究科無機材料工学専攻は修士課程学生定員17名、博士課程学生定員5名をもち、学生定員の1/2は学内推薦で、のこりは一般選考によって充足しています。

無機材料工学科は当節は本学の中でもっとも人気のある学科の一つで在学生の成績も優良です。卒業生の就職も極めて順調で求人数が就職希望者の10倍もあるという状況です。学部卒業生のほとんどは大学院に進学するので、就職の対象となるのは大部分が修士課程修了者です。

現在の無機材料工学科には本年度から増設された機能性セラミックス講座を含めて6講座があり、教授6名、助教授6名、助手9名、技官・事務官7名の定員をもっています。

学部学科及び類別学生定員

学部	類	学科名及び定員	類別定員
理学部	第1類	数 理 学	20
		物 理 学	25
		化 学	40
		応 用 物 理 学	34
		情 報 科 学	34
			153
工学部	第2類	金 属 工 学	34
		有 機 材 料 工 学	20
		無 機 材 料 工 学	30
	第3類	化 学 工 学	75
		高 分 子 工 学	34
		経 営 工 学	34
	第4類	機 械 工 学	60
		生 産 機 械 工 学	34
		機 械 物 理 工 学	34
	第5類	制 御 工 学	34
		電 気 ・ 電 子 工 学	55
		電 子 物 理 工 学	34
	第6類	情 報 工 学	40
		土 木 工 学	34
		建 築 学	45
		社 会 工 学	34
			113
		計	784
			784

大学院研究科の専攻と学生定員

理 工 学 研 究 科 (大岡山キャンパス)			
専攻名	修士定員	博士定員	
数 理 学	19	5	
物 理 学	23	6	
化 学	35	8	
応 用 物 理 学	20	5	
情 報 科 学	15	5	
金 属 工 学	15	5	
繊 維 工 学	17	5	
無 機 材 料 工 学	17	5	
化 学 工 学	44	12	
高 分 子 工 学	18	6	
機 械 工 学	35	10	
生 産 機 械 工 学	15	5	
機 械 物 理 工 学	15	5	
制 御 工 学	16	5	
経 営 工 学	15	5	
電 気 ・ 電 子 工 学	29	9	
電 子 物 理 工 学	18	6	
土 木 工 学	15	6	
建 築 学	20	6	
社 会 工 学	20	5	
原 子 核 工 学	24	7	
計	463	136	

工学部無機材料工学科の組織と職員 (昭和58年11月)

講 座 名	教 授	助 教 授	助 手	技官・事務官
無機合成材料	加藤誠軌	水谷惟恭	太植 京一郎 田松 敬三	松山勝美
結晶質材料	宇田川重和	選考中	浦井 和順 部川 博行	福富路子
非晶質材料	山根正之	選考中	井上 悟	山口千恵子
鉱産原料	小坂丈子	大津賀望	平岡 順一 岡田 清	
材料加工学	木村脩七(併任)	大門正機	後藤 誠史 浅賀 喜代志	大沢栄也
機能性セラミックス	選考中			
共 通			林 剛	上西義介 西井 修

## 研究室紹介

無機材料工学科の建物は、大岡山キャンパスの石川台地区にあります。

石川台1号館は延床面積2,186㎡で、3階には結晶質材料講座と非晶質材料講座を、2階には鉱産原料講座と材料加工学講座を収容し、1階には2年次および3年次の学生実験室と実験教官室、講義室、図書室、会議室、学生控室等があります。

### 結晶質材料講座 宇田川研究室

本講座は結晶質セラミックスに係る広い研究分野を担当して、この分野の諸問題を結晶化学の立場から研究しています。現在研究中の主なテーマは、 $\text{Ca}_2\text{SiO}_4$ の各種多形並びにケイ酸カルシウム水和物の結晶化学的研究、 $\text{Ca}_2\text{SiO}_4$ の水和反応等のセメント化学の研究、固体結晶の熱膨張及び熱膨張機構、コーディエライトをはじめとする種々の低膨張材料の研究、 $\beta$ -アルミナ並びに種々の固体電解質の研究、機械加工性マイカセラミックスの研究、マグネシアクリンカーの粒界の研究、多孔質アルミナ等のエネルギー関連材料の研究、粘土質窯業原料の研究等です。

研究室のモットーは“よく学び、よく遊べ”です。研究や討論に夜を徹する学生もいれば、スキー、登山、野球などスポーツに若さを燃焼させたり、“確率遊び”に興ずる学生もおり、人間性豊かな研究者を目指して研究と遊びに日夜研鑽しています。



研究室風景

### 非晶質材料講座 山根研究室

ガラスを主とする非晶質材料の研究室で、通称“ガラ研”と呼ばれています。研究の対象は酸化ガラスに限らず、ハロゲン化物ガラス、カルコゲナイドガラスにまで広げており、研究の内容はガラスの構造や物性に関する基礎的なものから、優れた工業材料を開発する為の工学的なものまで広い範囲に及んでいます。研究中のテーマとしては、ゾルーゲル法によるガラスの低温合成、ハロゲン化物ガラスの感光特性の研究、赤外透過性ハロゲン化物ガラスの作製、ガラスの均質度の測定、ガラスの熱的安定性と結晶化ガラスの研究などがあります。

研究室の基本指導方針は“各人の自主性と独創性の尊重”で、毎週研究会を行い各人の研究の進行状況をもとに全員で討論します。この他全員で参加する行事に雑誌会と工場見学があり、修士2年生は夏休みに夏期セミナーに参加して、全国のガラス研究者と研修・親睦をはかることにしています。



走査型電子顕微鏡

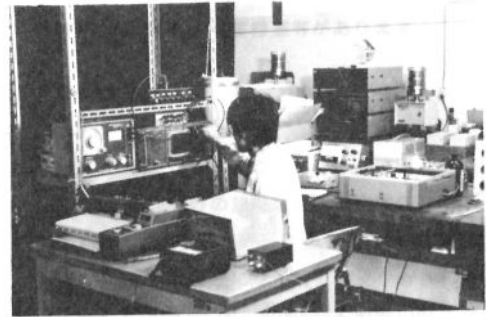


センターと直結のパソコン





粉末 X 線回折計



ガラスの電気伝導度測定



試料水平型高温 X 線回折計



ダブルビーム分光光度計



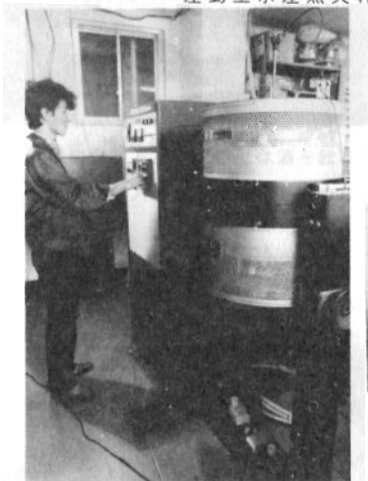
差動型示差熱天秤



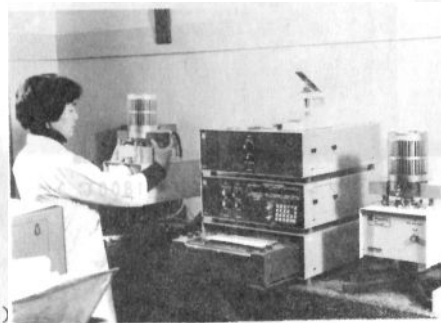
赤外分光光度計



マイコン PC-9801



ケラマックス電気炉 (<1800℃)



粘度 - 熱膨張計、DTA - DSC



グローブボックス



## 研究室紹介

### 鉱産原料講座 小坂・大津賀研究室

本講座では窯業原料として重要な粘土鉱物をはじめとする諸鉱物・岩石の性質や成因並びにその精製、利用や合成に関する研究を行っています。

最近の研究テーマとしては、火山堆積物の風化変質にともなう粘土化とその利用、地表下の熱水条件下で生成する粘土鉱物の成因、沈殿アロフェンやヒシングライトなど沈殿鉱物の生成機構とその合成、明バン石族鉱物の生成条件とその化学組成、土壌の石灰硬化反応による軟弱地盤の改良、火山地域における酸性条件下での岩石の変質過程、火山活動現象に伴う火山ガス、湧水、固形噴出物等の化学組成の変化やファイセラミックスに用いる原料の合成とその物性などがあります。

以上のような研究室の性格上、野外調査に出かける機会も多く、その間是一同起居を共にして文字通り“一つ釜の飯を食って”自然と親しく付き合うことになるので、普段の生活も極めて家庭的です。



蛍光 X 線分析装置

### 材料加工学講座 木村研究室

無機材料の製造と性質に関して粒界（界面）を中心に研究しています。研究テーマは、マグネシアバイクリスタルの試作と粒界の高温安定性、マグネシアの高温クリープ、マグネシアの高温電気伝導度、セラミックスの強度試験方法、セラミックス繊維強化複合材料と界面処理、炭素繊維—炭素複合材料の組織制御と機械的性質などです。

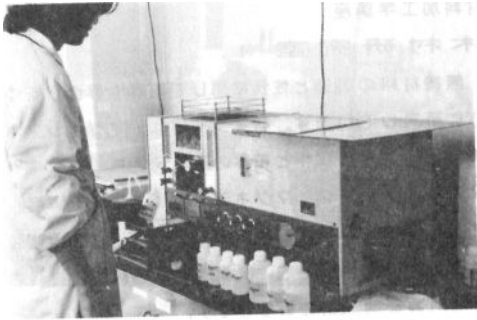
### 大門研究室

セメントとそれに関連のある材料の合成と物性について研究しています。研究テーマは、セメントおよび無機化合物の水和反応と、高炉スラグ、転炉スラグおよびフライアッシュなどの産業廃棄物の有効利用です。前者はセメントがなぜ固まるかという素朴な疑問から出発して無機物質と水との反応機構を解明しようとするもので、曲げ強度や引張り強度の非常に大きな硬化体の研究も進めています。後者は省資源、省エネルギーを目的として新種のセメントを開発するための研究です。

この講座にはスキー、山、各種スポーツ、碁、マージャンの自称名人が多数いて、お互いに他を圧倒すべく研鑽に励んでおり、時には酒を飲み高歌放言するなど、豊かな人間性の涵養にも努力しています。



勉強と談話の部屋



原子吸光法による微量分析



窯業原料の化学分析



粉末X線回折計



化学分析



粉末X線回折装置



伝導熱量計による水和熱測定



試作したコンクリートカヌー



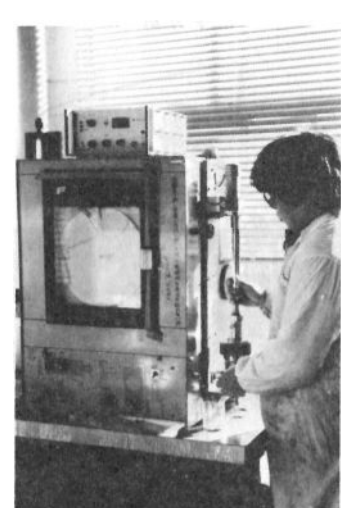
DSC-TG



マイコン



Kr吸着法による比表面積測定



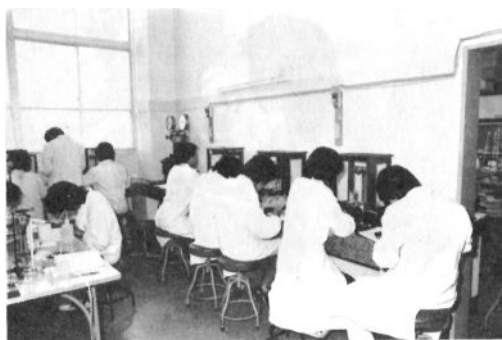
水銀圧入法による細孔分布測定

## 学生実験室

石川台1号館の1階にはほぼ1講座分の広さをもつ2年生と3年生の学生実験室があります。当学科では実験を重視しており、ここには3名の専任教官がいて指導にあたっていますが、実験日には各講座からも応援にかけつけます。なお、陶芸実習、七宝制作、ガラス細工なども必修となっています。

学生実験室は学生の溜場で、年に数回は教官や先輩と一緒に手造りのオデンや煮込みを囲んで大騒ぎしています。

毎年秋の工大祭では、女子大生など沢山のお客を集めて七宝のペンダント作りの指導に在学生在が汗を流すことになっています。



密度の測定



陶芸実習



化学分析



七宝製作



工大祭風景



ガラス細工

DO IT YOURSELF  
 10月27日 28日 陸路大前山車  
**七宝焼**  
 工大祭参加企画



工大祭風景

## 研究室紹介

石川台4号館は延床面積1,938㎡で、無機合成材料講座と新設の機能性セラミックス講座の研究室、共通研究施設、講義室、資料室、機械加工室、事務室等を収容しています。

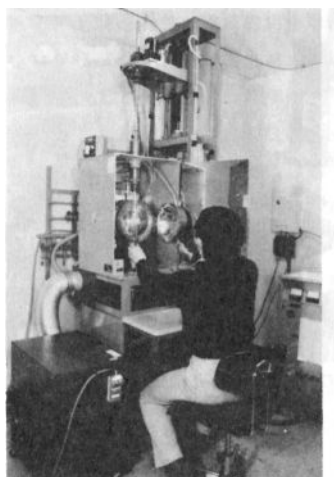
### 無機合成材料講座 加藤・水谷研究室

新しいセラミックスの合成、構造解析、物性測定そして応用につながる系統的な研究をしています。研究中のテーマには、ペロブスカイト系セラミックスの誘電性と微構造、ジルコニア系セラミックスの性質と微構造制御、窒化物系セラミックスの不定比性と物性、機能性セラミックス原料の合成と評価、超微粉体の製造プロセス、複酸化物単結晶の育成と評価および高温構造解析などがあります。

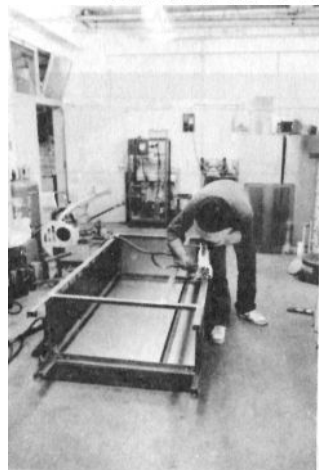
また、プロの機械屋やベテランの電気屋をそろえて研究に必要な各種機器の試作・開発を行っており、毎年の新入生には機械加工、溶接、塗装、ガラス細工などの基礎技術の特訓をしています。

研究室は東工大でもっともきれいです。共通施設のお守りをしているので大変忙しく、お掃除と肉体労働のノルマがあります。毎月のソフトボールの紅白戦と、夏休みの工場見学をかねた旅行で若さを発散させています。

### 共通研究施設



フークイメージ炉 (< 3000℃)



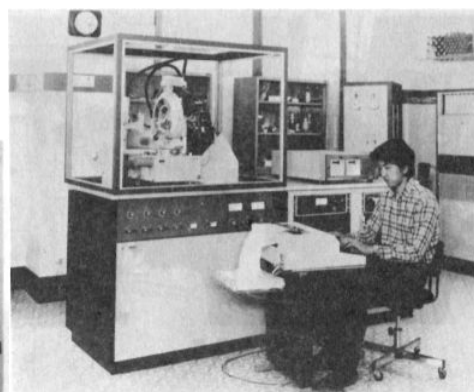
実験装置の溶接作業



200KV透過電子顕微鏡



X線回折計



四軸型単結晶X線回折計



高温X線回折計



学生の溜場

石川台4号館には全学共同利用の共通研究施設（研究協力部所管）を収容しており、当学科でこれら施設のお世話をしています。共通研究施設はX線分析室、電子顕微鏡室および質量分析室から成り、それぞれの施設では学内各研究室からの年間数百件の依頼試料を処理しています。

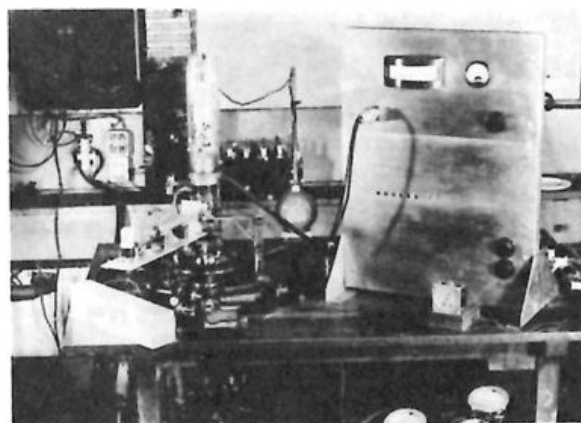
## 最初の X 線回折計

右の写真の装置は昭和 26 年頃、故岩井津一先生がわが国で最初に試作された粉末 X 線回折計で、敗戦後の困難な時期に活躍した手作りの装置です。

この装置は、ドイツ製の結晶儀を改造してガイガーカウンターとシンクロナスマーターを取りつけたゴニオメーターを使用しており、組立式の X 線管球を用い高圧が露出しています、当時はレコーダーが市販されていなかったため、写真の装置では出力をメーターで読んでいました。理学電機㈱はこの装置を参考にしてガイガーフレックスを製作市販しました。

下の写真は新しい粉末 X 線回折計で、測定結果が直ちにコンピューターで処理されて、ブラウン管上で JCPDS データと対比して同定できます。経験と勘と根気を必要とした X 線回折図形の解釈をコンピューターにまかせる時代がやってきたのです。

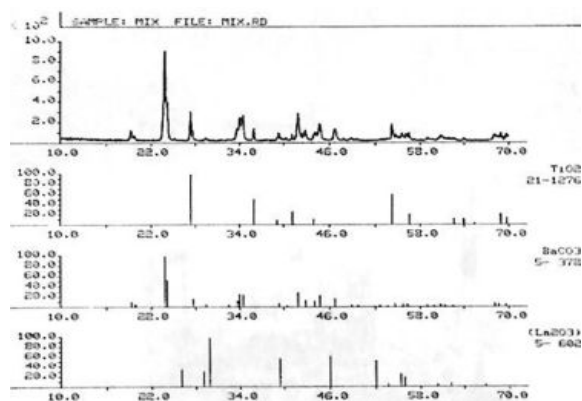
なお、東工大では学内のどこの TSS 端末からでも JCPDS データの検索を行うことができます。



わが国で最初の X 線回折計



全自動粉末 X 線回折計



## 平野陶磁器コレクション

人類の歴史とともに始まった最古の産業の一つである窯業は、新しいセラミックスの時代へといま大きく脱皮しつつあります。耐久性、耐熱性、耐食性、高硬度など従来からある窯業製品の性質に加えて、電気的特性、磁気的特性、光学的特性、機械的特性など特別の機能を備えた新しい材料が開発されています。

しかしながら、最近のわが国におけるニューセラミックスの進歩は決して一朝一夕の研究の成果ではありません。明治の開国とともに西洋の科学技術を積極的に吸収して近代化に努力したわが国の窯業の技術と生産量は戦前の段階で世界の水準に達しており、フェライトやチタバリをはじめとするニューセラミックスの分野でも世界に誇りうる業績を挙げた多数の先輩もっています。

平野陶磁器コレクションは元東京高等工業学校窯業科長であった平野耕輔先生の収集寄贈になるもので、明治中期から昭和10年ごろまでのわが国の近代的陶磁器産業の発達期における研究試作品および初期の工業製品を集めた異色のコレクションです。ここに収集されている72点

の品々は芸術的価値の高い美術品といったものではなく、明治維新とともに勃興した近代産業技術の発展の過程を示す歴史的遺産であり、初めての試作品であるとか、最初の工業製品であるという点に大きな意義が認められます。

平野先生は明治24年、東京職工学校の陶器玻璃工科を卒業し、引き続き母校にとどまって東京高等工業学校の教授および窯業科長として多年の間後進の指導にあたりました。その後は南満州鉄道株式会社の中央研究所窯業試験場長、商工省陶磁器試験所所長を歴任して斯界の発展につくされましたが、昭和12年に同試験所を退官された際に永年にわたって収集した蔵品を教育参考資料として母校に寄贈されたものがこのコレクションです。

このコレクションは戦後の混乱期に収集品の約1/3が失われましたが、現在は、無機材料工学科の資料室に保管展示しています。コレクションは学校および試験場における研究試作品（試）と、工場における初期製品（工）とに分類されており、それぞれに番号がついています。そのいくつかを以下に紹介します。

### 試2 旭焼、額皿（雀画）、明治18年

旭焼はワグネル先生の創案になるもので、白い陶器質の素地に透明でひびのない釉薬をかけ、その釉下に色絵を施したところに特色があります。素地には木節粘土と蛙目粘土、石英粉および長石粉を配合して珪酸を71%としたものを使用しました。釉薬の原料は鉛丹、唐の土（炭酸鉛）、石灰、石粉、亜鉛華、ホウ砂、ホウ酸等を用い、着色剤としては鉄、錫、コバルト、クロム、マンガン、金などを使用しました。ワグネル先生は明治16年からこの研究に着手して試験工場をつくり、はじめは吾妻焼と命名しましたが、明治20年に設備を東京職工学校に移して



旭焼と改称したものです。旭焼製造所は明治29年経営難のために閉鎖されましたが、わが国の陶磁器に大きな影響を与えたことは間違いありません。



## 試 18 磁器、花瓶

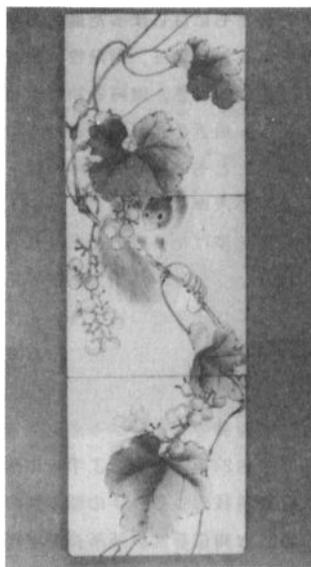
大正2年頃、満鉄中央試験所窯業試験工場における試作品で、中国景德鎮の上絵付工を招聘して彩画したものです。同試験所工場は明治45年満鉄中央試験所内に設置され、陶磁器、耐火煉瓦、ガラスなどの製造、工業化試験を行いました。



試 18 磁器、花瓶

## 工 27 旭焼タイル、明治23~29年

明治23年、浅野総一郎の出資で、旭焼製造所ができて輸出用のストーブ飾タイル等を製造しました。この作品はわが国でつくられた最初の洋式タイルで、裏面には「大日本東京深川区東元町旭焼製造所」の刻印があります。



## 工 4 硬質磁器、蓋物

明治29年、松村硬質陶器株式会社社長松村八次郎氏（明治24年東京工業学校陶器玻璃工科卒業）がはじめて純白硬質磁器を創製して専売特許（特許第2797号）を得た際の試作品です。



工 4 硬質磁器、蓋物

## 試 7 新製マジョリカ、鉢

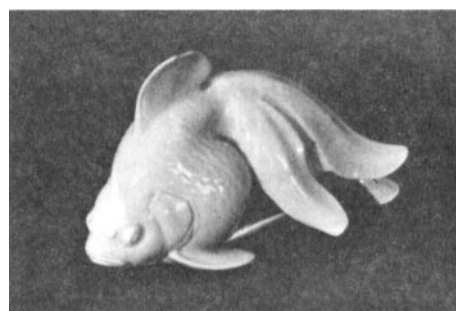
明治36~37年、東京工業学校窯業科で、ドイツのマジョリカに準じたものとして研究された不透明釉石灰質陶器で、日本趣味を取り入れたこの種の作品の最初のものです。



試 7 新製マジョリカ、鉢

## 試 25 陶試紅、金魚

昭和9年頃の商工省陶磁器試験所における試作品で、高価な金化合物からなる桃色顔料に代るものとして開発された高火度用桃色顔料「陶試紅」を混入した磁器坯土でつくられています。



### 工 10 磁器、皿

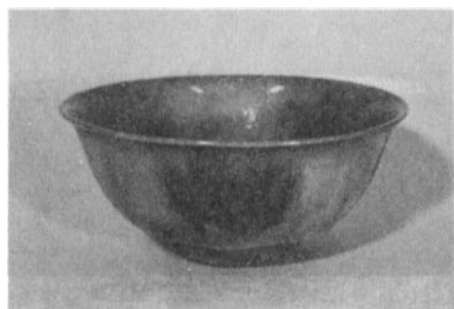
明治 41 年頃の日本陶器株式会社の製品です。同社は明治 37 年名古屋市に設立され、ドイツ、オーストリア産の長石質硬質磁器に準ずる洋食器をわが国ではじめて工業的に製造しました。



工 10 磁器、皿

### 試 27 均窯鉢

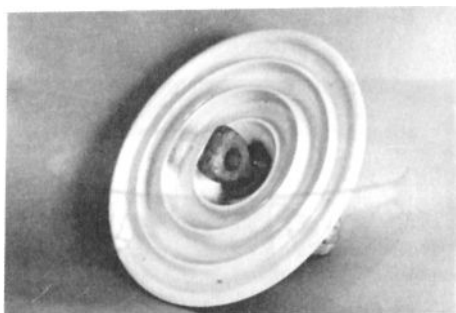
商工省陶磁器試験所において、中国の宋代及び清朝の官窯にみられる豪華端正な古来釉薬を科学的に研究し、各種の工芸品に再現応用した際の試作品です。



試 27 均窯鉢

### 工 29 懸垂罫子

昭和 3 年、日本罫子株式会社のトンネル窯による第 1 回焼成品で、同社は昭和 3 年 9 月、わが国ではじめて直火焼成式トンネル窯を導入して製品の品質が格段に向上しました。



工 29 懸垂罫子

### 試 20 粗陶器、井

大正 2 年頃、満鉄中央試験所窯業試験工場の試作品で、満州における最初の陶器製品です。



### 工 20 陶歯

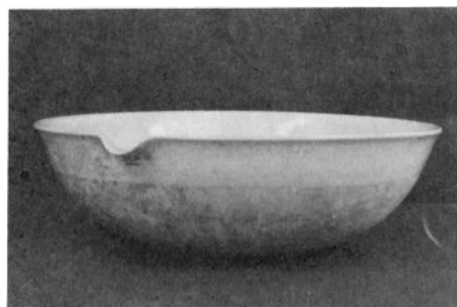
陶歯は明治 30 年ころから試作が行なわれていましたが、大正 11 年、松風陶歯製造株式会社が設立されて外国製品に劣らない製品が製造されるようになりました。写真は当時の製品見本です。



工 20 陶歯

### 工 19 化学磁器、蒸発皿

大正初年、従来輸入に頼っていたドイツ製品に匹敵する性能を備えた化学磁器の製造が松風工業株式会社で開始された当初の製品です。

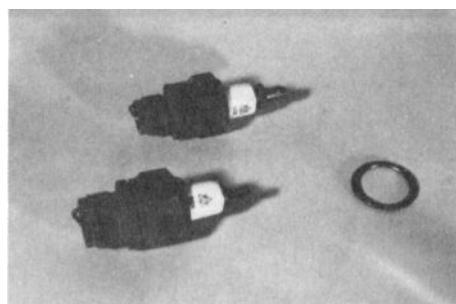


工 19 化学磁器、蒸発皿



### 工 31 点火栓

昭和5年、日本碍子㈱の製品です。同社は点火栓専用のトンネル窯を築いて昭和5年10月1日からN G点火栓の名称で販売を開始した当時の製品です。

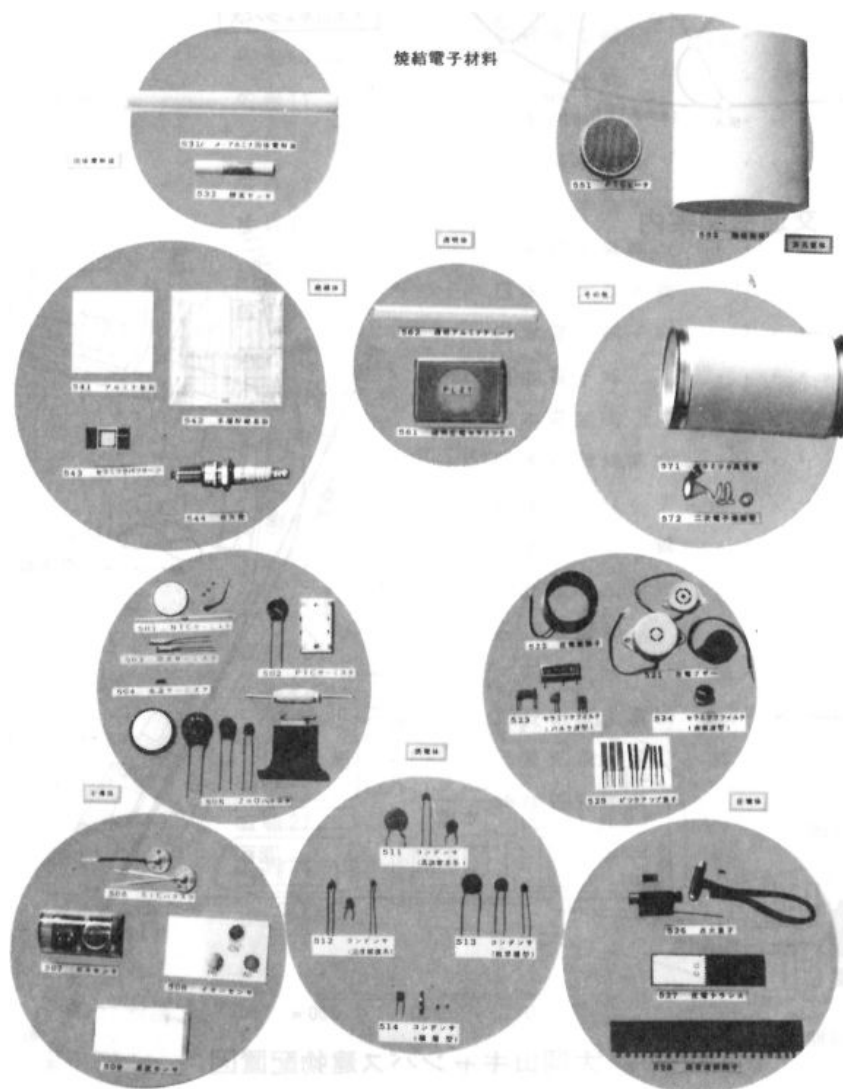


工 31 点火栓

## 現代工業技術のタイムカプセル

粉体粉末冶金協会では協会創立20周年の記念事業として1977年の時点における代表的な工業製品のタイムカプセルを計画されましたが、その一組が無機材料工学科に寄贈されました。写真はその一部です。

この標本は、焼結機械構成部品関係製品83点、超硬合金関係製品39点、タングステン・モリブデン関係製品36点、フェライト関係製品44点、焼結電子材料関係製品33点から成り、何れも工業的に生産されている製品で、わが国の技術の最高水準を代表する品々です。



## 旭 焼

旭焼はワグネルの創案になる陶器で、何れも日本風絵画様式の芸術性豊かな作品です。

一般の下絵具は高火度で焼成しますが、旭焼は透明釉の下に上絵具のような低火度焼成絵具で細密に表現する大変めずらしい技法を採用しています。

### 色絵 檜扇図 皿

明治 18～20 年 (1885～87)

口径：33.0 cm 東京国立博物館蔵

高台内に「吾妻焼印」の銘がある。明治 20 年に吾妻焼を旭焼と改称した。



### 釉下彩 蘆雁図 皿

明治 20～29 年 (1887～96)

口径：40.6 cm 京都国立博物館蔵

高台内に葡萄樹図花瓶と同じゴム版の旭マークがある。口縁の金は上絵である。



### 釉下彩 葡萄樹図 花瓶 (1対)

明治 20～29 年 (1887～96)

口径 12.3cm 高さ 36.0cm 京都国立博物館蔵

高台内にゴム版で「ASAHI YAKI 旭焼 TOKIO」のマークがある。



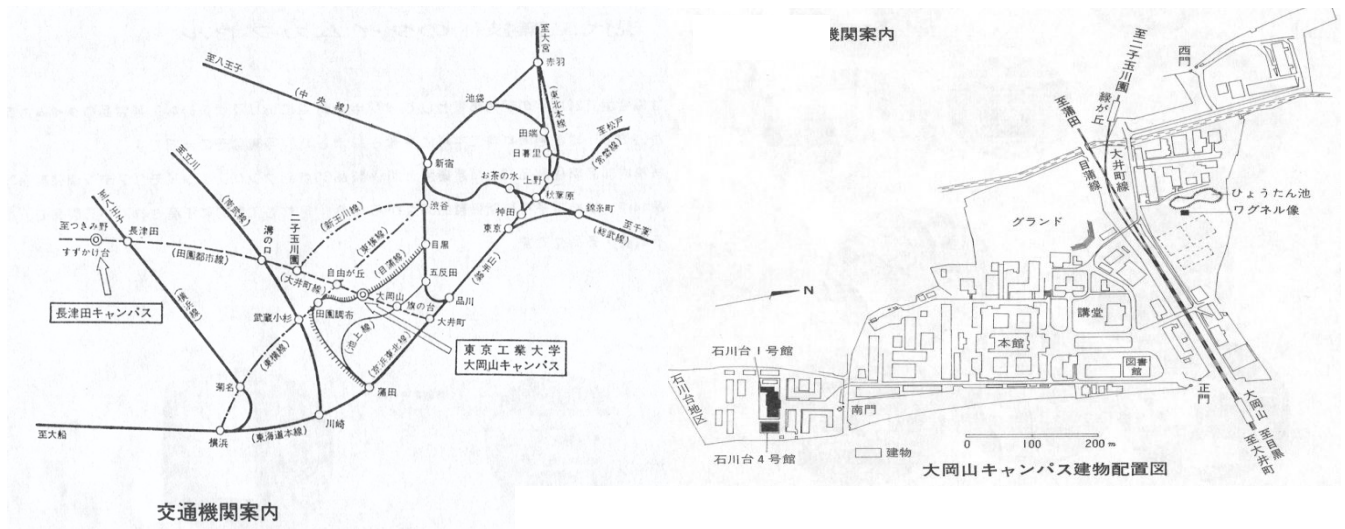
### 釉下彩 花鳥図 陶板 (4枚組)

明治 23～29 年 (1890～96)

縦：15.1 x 横：15.1cm 京都国立博物館蔵  
裏面に「大日本東京深川区東元町旭焼製造場」の陽刻銘がある。



(本頁は、名簿本文中より移動)



## 広告を掲載していただいた企業

広告掲載でご協力いただいた以下の各企業と、それとは別に事業資金についてご援助いただいた多数の企業に感謝します。

アグネ技術センター	広告 3	電気化学工業(株)	広告 28
旭硝子(株)	広告 2	東海カーボン(株)	広告 29
アルプス電気(株)	広告 4	東京高級炉材(株)	広告 10, 30
伊奈製陶(株)	広告 5	東興化学(株)	広告 31
(株)イムカ	広告 6	東陶機器(株)	広告 32
ウシオ電機(株)	広告 7	東洋炭素(株)	広告 33
宇部興産(株)	広告 8	東レ(株)	広告 34
(株)オーバーシーズ・		徳山曹達(株)	広告 35, 49
エックスレイ・サービス	広告 3	鳴海製陶(株)	広告 36
大倉陶園(株)	広告 9	ニチアス(株)	広告 37
川崎製鉄(株)	広告 10, 30	日軽化工(株)	広告 38
キャノンシステム販売(株)	広告 11	ニッコー(株)	広告 39
黒崎窯業(株)	広告 12	日東紡(株)	広告 40
(株)斎藤工機	広告 13	日本板硝子(株)	広告 41
佐々木硝子(株)	広告 15	日本化学陶業(株)	広告 42
昭和電工(株)	広告 14	日本軽金属(株)	広告 43, 56
信越化学工業(株)	広告 16	日本セメント(株)	広告 44
新日本製鉄(株)	広告 15	日本電気硝子(株)	広告 45
真保炉材工業(株)	広告 17, 23	日本電子(株)	広告 46
住友金属工業(株)	広告 18	日本電装(株)	広告 47
住友金属鉱山(株)	広告 19	日本特殊陶業(株)	広告 48
住友電気工業(株)	広告 20	日本フィリップス(株)	広告 57, 58
セントラル硝子(株)	広告 21	日本フェロー(株)	広告 35, 49
太陽誘電(株)	広告 22	日立化成工業(株)	広告 50
竹田印刷(株)	広告 23	日立電線(株)	広告 51
タマ生化学(株)	広告 17, 24	古河電工(株)	広告 52
大日精化工業(株)	広告 25	三菱化成工業(株)	広告 53
チタン工業(株)	広告 26	三菱鉱業セメント(株)	広告 54
中外製薬(株)	広告 27	(株)村田製作所	広告 55

## あとがき

常任幹事 加藤誠軌

懸案になっていた新しい会員名簿を4年ぶりにお届けします。編集作業がおくれて1984年の年賀状に間に合わなくなったこととお詫びします。

当節はセラミックスが時代の花形に躍進してマスコミの紙面を飾り、本学でも昨年は無機材料工学科の学部入学定員が20名から30名に増員され、今年はさらに機能性セラミックス講座が増設されました。この名簿が会員相互の情報交換のお役に立てれば幸いです。

今回の名簿はできるだけ正確で見易く引き易いものを作成するようにと心掛けたつもりで、名簿の原稿は研究室で別途購入したワープロ(広告11頁参照)を使い、今年の5月からセミプロのタイピストを週4回、延400時間以上お願いして原稿を入力し(74頁参照)、各研究室に回覧して卒業生の住所や勤務先を校正していただき、数稿を重ねてようやく印刷に漕ぎつけた次第です。名簿の編集は仲々大変な作業です。なにしろ会員の移動がはげしくて前回の名簿は全面的に訂正する必要があり(前頁をごらん下さい)、校正した印刷原稿とゼロックス用紙の厚さが20cmにもなりました。それでも、毎回の総会や懇親会への出欠葉書の回収率も30%程度と低いので、まだかなりの方が消息不明となっていることは残念です。なお、古い時代の卒業生と教官については各年度の東京職工学校一覧、東京高等工業学校一覧、東京工業大学一覧を参照して前回までの名簿をかなり訂正することができました。完全な名簿を作成するのは無理というものですが、住所などに変更のあった場合にはぜひご連絡下さい。また、名簿の間違い等を指摘していただければ幸いです。

窯業同窓会は従来から有志の寄附による事業資金によって運営して参りましたが、全会員の20%程度の少数の会員によって維持されているというのが実状です。会費を徴収せよとの有力なご意見がありますが、この場合どれ位の方々が送金して下さるかは疑問で現在よりも収入が減るという見方もあります。また、会費を徴収しない人に会誌を送らないということは会の発展のためにマイナスになると考えられます。入会金をとれとのご意見もありますが、毎年の卒業生が少ない現状では大幅な収入増は期待できず、既に入会している会員からこれを取り立てることも難しいことです。

という次第で、会の財政基盤を確立するための特効薬はなかなか見付からないというのが本音です。なお、従来から会誌や名簿の発送などには研究室の学生を使っており、会の運営と事務処理の人員費は一切支出しておりません。今回の名簿の発行と郵送には約300万円の費用が必要であり、全会員から実費を徴収できたとしても1冊が2,000円位になります。というわけでぜひ皆様のご協力をお願いする次第です。これらの事情をご賢察のうえ、ご協力いただける場合には同封の振替用紙でご送金下さるようお願い申し上げます。

なお、従来の名簿で広告社を使っておりましたが、今回の名簿では同窓会から各企業に直接お願い致しましたところ沢山の企業から広告掲載と事業資金の申し込みをいただき大変感謝しております。

## お 願 い

住所変更などのご連絡は下記へお願いします。

152 東京都目黒区大岡山 2-12-1  
東京工業大学工学部無機材料工学科  
加藤研究室(石川台4号館) 気付  
窯業同窓会事務局  
Tel 03-726-1111(内) 2518

事業資金のご送金は下記あてにお願いします。

銀行振込の場合

第一勧業銀行大岡山支店 普通預金口座 1257281  
東京都目黒区大岡山 2-12-1  
東京工業大学内 窯業同窓会 小坂丈予

郵便局振込の場合

口座番号東京 0196855 窯業同窓会

## お詫び

平野コレクション関連の記事は、名簿の中にも埋め草として配置されておりました。これらを一ヶ所に纏め、紙面節約を考慮して、大きく配置替えをしたところが有ります。ご理解下さい。(アーカイブ編集委員会)